

1. 先天性尿路異常に関する研究

2. 透析患者における白血球尿の調査

3. 糸球体障害に伴う白血球尿の意義に関する研究（第一報）

新潟大学・第二内科 大 下 康 民
大 沢 源 吾
武 田 元
丸 山 実

1. 先天性尿路異常に関する調査

先天性尿路異常の調査の目的で、昭和52年1月から12月までの1年間に、新大病院中央放射線部で静脈性腎盂造影を施行した1,192名のレ線所見を分析した。

1,192例中28例(1.09%)にみられた異常は重複腎盂腎杯15、嚢胞腎4、馬蹄腎3、腎低形成1、憩室形成5例であった。重複腎盂腎杯15例中7例が腎ないし尿路結石を伴っており、ほかに腎盂腎炎を伴ったものが1例あった。

次に、腎盂腎炎と先天性尿路異常との関係のみる目的で、昭和41年から46年の6年間に、新大第二内科に入院した腎盂腎炎43例の腎盂造影所見を検討した。IPV施行37例全例に異常を認めなかった。但し、IVPのみではVURなど下部尿路の異常を見逃している可能性がある。

以上より、腎及び尿管部の異常形成と腎盂腎炎との関係は、成人例でみる限り、それほど密接ではなさそうに思われた。

2. 透析患者における白血球尿の調査

人工透析患者31例の尿中白血球を調査した。基礎疾患別では慢性糸球体腎炎23、慢性腎盂腎炎1、痛風腎2、嚢胞腎4、不明1である。

尿沈渣の400倍検鏡で毎視野6ヶ以上の白血球尿が30例中11例(36.7%)にみられ、このうちの8例に尿定量培養を施行し、1例にE. coliを $10^5/ml$ 以上検出したが、他の7例には有意の細菌尿を認めなかった。他方、毎視野5ヶ以下の19例中18例に尿細菌定量培養を施行し、1例にE. coliの有意の排菌を認めた。

透析患者の白血球尿は必ずしも尿路感染と結びつけ得ないと思われる。

3. 糸球体障害に伴う白血球尿の意義に関する検討（第一報）

糸球体腎炎に伴う白血球尿は必ずしも尿路感染の結果ではないと考え、その意義を追求するため、各種糸球体腎炎における白血球尿の頻度について検討した。

対象は糖尿病86例、および原発性糸球体傷害393例の計479例で、原発性糸球体傷害の内訳は、急性糸球体腎炎38例、慢性型糸球体腎炎253例、微少変化型ネ症54例、膜性型ネ症25例、膜性増殖性糸球体腎炎23例である。全例に腎生検を施行し、組織像が確かめられた。検尿は早朝尿について施行し、入院初期の、腎クリアランス検査施行前の成績をとりあげた。尿培養は中間尿について定量的に行なった。尿沈渣の400倍検鏡で毎視野6ヶ以上の白血球尿を陽性とした。

陽性白血球尿の出現率は糖尿病16.3%、慢性型糸球体腎炎23.7%、微少変化型ネ症24.1%、膜性型ネ症32%、急性糸球体腎炎34.2%、膜性増殖性糸球体腎炎43.5%であった。慢性型糸球体腎炎のうち蛍光抗体法でIgA・IgGの併存群に特に高率に認めた。

白血球尿が最も高率の膜性増殖性腎炎23例中、白血球尿陽性の10例中9例に尿定量培養を行ったが1例にのみ有意の細菌尿を認めた。陰性白血球尿11例の全例に有意の細菌尿を認め得なかった。

すなわち、従来から腎盂腎炎との関係を強調されてきた糖尿病におけるよりも、各種糸球体腎炎において、より高率に白血球尿が認められることが明らかとなった。これら白血球尿は必ずしも有意の細菌尿とは結びつけ得ない。糸球体障害に関係した何らかの異常が糸球体もしくは尿細管經由で尿中に白血球を遊出させている可能性も示唆される。



1. 先天性尿路異常に関する調査

先天性尿路異常の調査の目的で,昭和 52 年 1 月から 12 月までの 1 年間に,新大病院中央放射線部で静脈性腎盂造影を施行した 1,192 名のレ線所見を分析した。

1,192 例中 28 例(1.09%)にみられた異常は重複腎盂腎杯 15,嚢胞腎 4,馬蹄腎 3,腎低形成 1,憩室形成 5 例であった。重複腎盂腎杯 15 例中 7 例が腎ないし尿路結石を伴っており,ほかに腎盂腎炎を伴ったものが 1 例あった。